

古墳時代における鉄製環頭大刀把頭意匠の「復古」的採用の可能性

金 宇 大

はじめに

本稿で筆者が取り組む課題は、古墳時代の刀剣類において「伝世」あるいは「復古再生」と認定し得る事例が普遍的に存在するのを探ることである。

古墳時代刀剣類の明らかな伝世事例として、まず思い浮かぶのは、奈良県東大寺山古墳の「中平」銘金象嵌花形飾環頭大刀である。刀背に24字の銘文が金象嵌されており、冒頭の「中平」が後漢の年号(184年～190年)を示すとされる。この大刀が出土した東大寺山古墳は、各種副葬品から古墳時代前期後半に位置づけられており[小田木・藤原編 2011]、先述の中平年間から副葬までの間に200年以上の時期差がある。ただし、このケースは紀年銘という特殊な条件によって偶然伝世を認定し得た事例であり⁽¹⁾、古墳から出土する一般的な刀剣類で、明確な伝世事例と認定できるものは見出しがたい。

一方、「復古再生」という観点から連想されるのは、奈良県藤ノ木古墳出土の装飾付剣である。古墳時代中期以降、「鉄剣」は次第に「鉄刀」へと置換が進み、古墳時代後期に入ると鉄剣自体の出土量が激減、ほぼ姿を消す[菊地 2010]。そうした中、後期後半に入った藤ノ木古墳で、古墳時代中期に盛行した有段有突起型把装具[岩本 2006]を華美に金属装化した鉄剣が製作されたことは、特筆に値する。しかも、剣身関部には弥生時代後期～終末期の鉄剣にみられる刃関双孔が設けられており、約250年の時間的空白を経て復古的なデザインが採用されたことが指摘されている[水野 2022a]。

しかし、これらはいずれも特殊な例外的資料であり、個別の事例としては非常に興味深いものの、古墳時代刀剣において一般的に認められるものではない。より普遍的な事象としての「伝世」・「復古再生」の事例を探る中で、検討に値すると考えたのが橋本英将の振り環頭大刀出現に関する指摘である。氏は、大阪府心合寺山古墳の鉄製三葉環頭大刀の環頭部に付着した木質痕跡を検討し、「環頭部の切先側2/3ほどは、木製の柄頭装具に覆われており、三葉部はほとんどみえていなかった」ことを確認した。その上で、外環の半分が把頭装具に隠れた三葉環頭大刀のシルエットと振り環頭大刀との見かけ上の類似に言及し、素環頭大刀の装具に関する先行研究を参照しつつ、「振り環付大刀⁽²⁾の成立には、伝統的な倭装大刀の変遷に、装具のつけかえにより環頭部を柄頭装具で覆い隠し、柄頭端部から環の上部のみがアーチ状にのびる、素環頭大刀、三葉環頭大刀の存在が影響して成立したものであると考えられる」(図1)と述べ

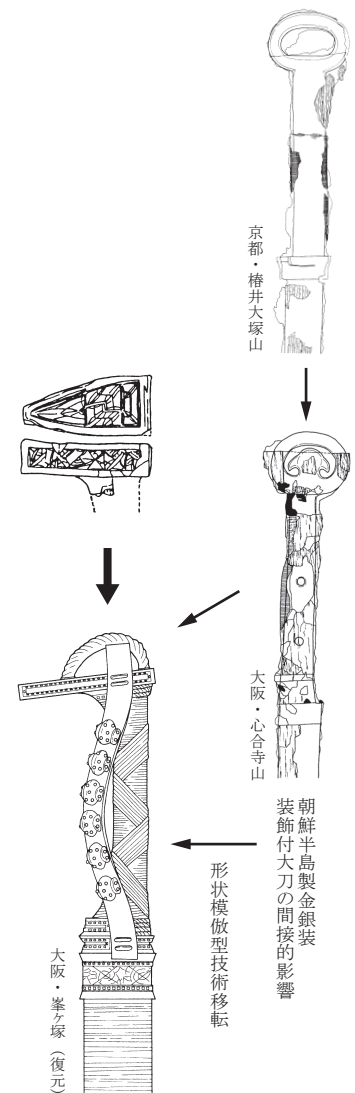


図1 橋本英将による振り環頭大刀の成立想定図

ている [橋本 2005]。

上記の見解が正しいとすれば、古墳時代後期初頭頃に新たに創出された振り環頭大刀が、ある種の「復古再生」的な観点からデザインされたものであるということになる。そこで本稿では、倭装大刀の出現をそうした視点から評価できるのかを考えることに主眼を置き、古墳時代前・中期における鉄製環頭大刀の把装具の在り方とその社会的価値付けについて考察する。

1. 鉄製環頭大刀の研究史と課題

上述した課題の検討に際して重要となるのは、振り環頭大刀出現以前の鉄製環頭大刀がいかなる社会的位置を占めていたのか、より具体的にいえば、「復古再生」に値するような強い象徴性を有していたのか否かである。そこでまずは、古墳時代の日本列島出土鉄製環頭大刀 (図2) を主に扱った基礎的研究の概況を整理し、上記の課題解明のために取り組むべき点を明確にしておく。

(1) 鉄製環頭大刀研究小史

把頭になんらかの装飾部を付した刀剣に関する研究史は戦前に遡る [高橋 1910 ほか] が、いずれも検討の中心は貴金属製の外装をもつ、いわゆる「装飾付大刀」が対象であった。貴金属装飾をと

もなわない鉄製の環頭大刀は、その存在には言及されていたものの [後藤 1928、末永 1938、神林 1940 など]、大きく注目されることはなかった。戦後、小林行雄により福岡県一貴山銚子塚古墳の報告書に寄せられた素環頭大刀に関する考察が、鉄製環頭大刀のみを扱った初めての論考である。小林は、素環頭大刀が出土した古墳の共伴遺物からその盛行時期に言及しつつ、いわゆる装飾付大刀に年代が先行することを指摘した [小林 1952]。

その後、素環頭大刀に対する本格的な分類研究が次第に進展していく。杉原和雄は、素環頭刀の環頭のつくりから、環頭部分を茎から打ち延ばして一体でつくる「共作り」と、茎とは別個に製作した円環を鍛接する「別作り」とにわけ、前者は弥生時代に、後者は古墳時代に多いと指摘した [杉原 1968]。

弥生時代の資料を中心に扱った児玉真一は、環の平面形から「把が環のほぼ中央に位置するもの」と「環が把の背側から直線的に伸びてリングを作るもの」という分類を設定した [児玉 1982]。この平面形のバラエティによる分類はとりわけ弥生時代資料に有効で、例えば豊島直博は平面形による分類から列島製品を抽出し、地域差を明らかにしている [豊島 2005]。

研究史上、一つの画期となった論考が、今尾文昭による鉄製素環頭大刀の総合的検討である。今尾は、杉原や児玉が着目した「環頭のつくり」や「環体の形状」に加え、茎幅と環頭径の比率や刀身部分の各種属性、すなわち長さ、切先形状、刀身の反り、関の有無、外装といった多くの視点に言及しつつ、分布や出土状況を分析した。氏はさらに、中国・朝鮮半島の出土事例との比較を通じて日本列島資料の系譜的評価を試み、その歴史的背景について論じている [今尾 1982]。

大陸の出土資料を視野に、鉄製環頭大刀の包括的分析を試行する研究は、

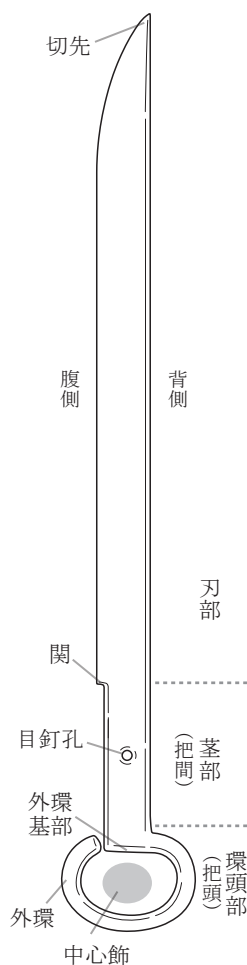


図2 鉄製環頭大刀の各部名称

禹在柄や池淵俊一に継承される。禹は、全長を基準に素環頭大刀の器種を細かく分類し、長幅比との対応関係からその実用性を論じた。さらに、関、茎、切先や環頭の形状といった属性の類型を設定・整理し、中国・朝鮮半島の出土資料と比較することで環頭刀の変遷が汎東アジア的に連動することを説いた〔禹 1991〕。池淵も、古墳時代前半の鉄製武器を整理・検討する中で素環頭大刀に言及し、環頭の平面形態と茎の分類を組み合わせた型式設定を試みている。その上で、やはり中国・朝鮮半島の資料と比較しつつ、列島内生産の有無を論じた〔池淵 1993〕。

古墳時代の鉄製環頭大刀に関する基礎的な分類研究は、その後しばらく停滞する。一方で、環頭大刀の有機質材製外装の復元的研究が進む。置田雅昭は、天理参考館が所蔵する中国出土鉄製素環頭大刀の把の痕跡を仔細に観察・検討し、一木でつくった把材の背側に刳り込みを施し、その溝に茎をスライドさせて挿入・装着させるいわゆる「茎落とし込み構造」をもつことを確認、同様の構造を有する把が島根県大成古墳例など日本列島の出土資料でも認められることを指摘した〔置田 1989〕。菊地芳朗は、環頭をもたない直刀や剣、ヤリを含めて、刀剣外装の構造に関する分析を深め、時期的な変遷を整理した。その上で、装具の特徴において環頭大刀と直刀の間で大きな差異は見出しがたいことを指摘している〔菊地 1996・2010〕。

加藤一郎も、素環頭大刀の把装具に関する復元的検討に取り組んだ。その中で、中国出土の素環頭大刀は茎落とし込みという構造においては日本列島出土資料と共通するものの、列島資料は①把に明瞭な段差を有する点、②把の木質が素環頭部まで達する点で明らかな差異が認められることを指摘した〔加藤 2002〕。素環頭大刀の環頭部が、一部把装具に隠れる構造となっていることは、先の今尾文昭による研究でも論及されていたが〔今尾 1982〕、舶載品の可能性が高い刀本体に、日本列島独自の拵えが取り付けられている可能性が改めて明確化した。こうした外環を一部覆い隠す把装具は鉄製三葉環頭大刀でも認められている〔橋本 2005〕。山内紀嗣は、古墳時代前期後半には素環頭大刀に倭風の拵えを付すのが盛んとなった一方で、環頭そのものの価値が失われている可能性に言及した〔山内 2010〕。

（2）研究の課題

先述したように、本稿の目的は、振り環頭大刀の把頭意匠を「復古再生」的視点から解釈し得るのかを確かめるため、古墳時代前半における鉄製環頭大刀の把装具意匠の位置付けを明らかにすることである。それを踏まえて研究史上の課題を探ると、日本列島出土の鉄製環頭大刀の系譜的整理が未だ不十分である点に着目できる。既往の研究で中国・朝鮮半島との関連性はある程度指摘されているものの、日本列島で出土した個々の実物資料が、具体的にどこから舶載されたものかといった点は、依然議論の余地を残している。最近、水野敏典が奈良県黒塚古墳で出土した長大な素環頭大刀の製作地を具体的に検討しているが〔水野 2022〕、こうした作業を型式レベルで進める必要がある。

日本列島出土の鉄製環頭大刀には、それぞれ異なる複数の系譜をもった資料が混在していると考えられる。近年筆者は、日本列島出土の三葉環頭大刀を悉皆的に検討し、古墳時代前期には中国漢代の系譜を継ぐ三葉環頭大刀が中国大陸から日本列島へもたらされていたが、古墳時代中期中葉頃を境に、舶載元が朝鮮半島へと移ることを指摘した〔金 2021〕。素環頭大刀に関しては列島製品の存在を認める見解もあり⁽³⁾、実際はこうした系譜の峻別は容易でない。しかし、当該時期における鉄製環頭大刀の社会的価値を明確に把握するには、こうした系譜的検討が不可欠となる。

2. 鉄製環頭大刀の基礎的分析

(1) 鉄製環頭大刀を構成する諸属性 (図3)

先述したように、古墳時代の鉄製環頭大刀には複数の系譜が内在するとみられる。当該時期における鉄製環頭大刀の社会的位置付けを探るにあたって、この系譜差を明確にすることが急務となる。そこで、系譜論的な視点から環頭大刀の分類を考えるため、鉄製環頭大刀を構成する以下の諸要素を取り上げる。これらの属性の相関関係をもとに型式を設定し、鉄製環頭大刀における系譜差の抽出を試みる。

中心飾の形態 鉄製環頭大刀の環頭部は、大きく、中心飾をもたない「素環」と外環内部に三葉のパルメット状意匠を配した、いわゆる「三葉環」にわけられる⁽⁴⁾。このうち後者については、前稿で三葉文の形態を2種4類に区分しており〔金2021〕、本稿でもこの分類に準拠する。すなわち、中央の主葉が円形をなす「円葉」のうち、両側葉が上方に伸びるものを「円葉a類」、下に垂れ下がるものを「円葉b類」、主葉が上方に伸びる「尖葉」のうち、主葉や側葉の角を明瞭に残したまま、平板につくり出す「尖葉a類」、主葉や側葉の角を面取りし、丸く立体的につくり出した「尖葉b類」に分類する。

外環の形状 環頭部の外環の形状差に注目する。前稿〔金2021〕の分類同様、環頭部の径の数値をもとに真円度数⁽⁵⁾を算出し、75未満のものを「扁楕円形」、75以上80未満のものを「楕円形」、80以上のものを「円形」と呼称する。なお、三葉環頭大刀には、外環が円形でなく上円下方状の「蒲鉾形」を呈するものがある。

外環の接続方法 外環と茎を共づくりにした「一体型」と、薄く打ち延ばした茎尻で別づくりの円環を巻き込んで接合した「接合型」に区分する。これらにはそれぞれ、外環基部から伸びる環頭茎を刀身の茎と重ねて銲接する「合わせ仕口」の事例も存在する。

茎の形状 関元から一定の幅を維持したまま真っ直ぐ環頭基部まで続く「直茎」と、関が大きく切れ込み、刀身の半分近い幅まで著しく細まる「細茎」にわけられる。「直茎」には、環頭基部に向けて若干細まるものも含める⁽⁶⁾。

鉄製装具の有無 鉄製環頭大刀にとまなう装具は多くが木製であるが、中には別づくりの鉄製装具が付随する例が存在する。具体的には、木製の把材を固定する平面倒卵形の責金具をとまなうもの

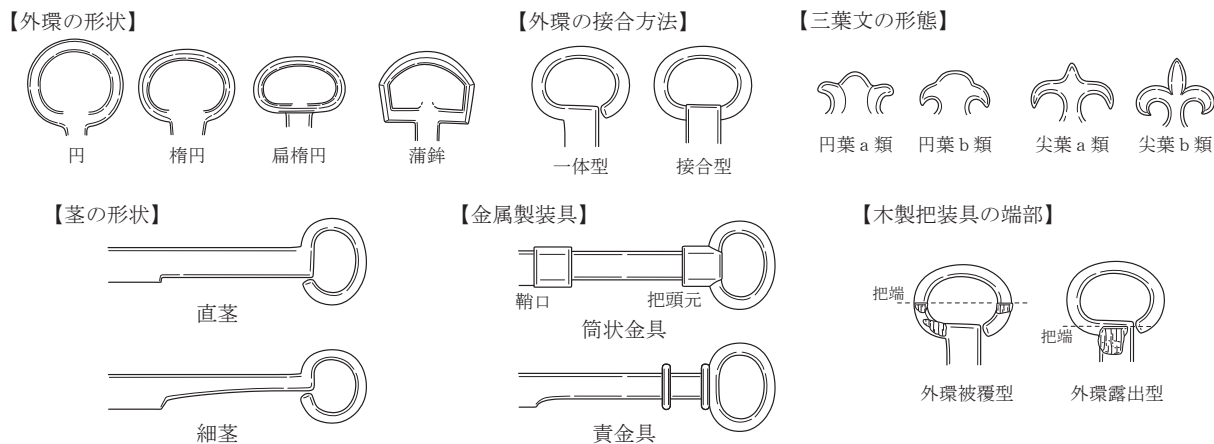


図3 鉄製環頭大刀を構成する諸属性

と、環頭部の付け根や鞘口に筒状金具を付すものがある。

木製把装具の構造 先行研究でも指摘されているように、環頭部の一部が木製の把装具に覆われて見えなくなっている例が認められる。把自体が完存するものは確認できないものの、外環に遺存する木質痕跡から、外環を被覆する木製装具の形状を推測することができる。木質の付着が認められる場合に限定されるが、把端の木質痕跡が外環基部よりも把頭側の外環に及んでいるものを「外環被覆型」、明らかに把装具の端部が外環基部までに収まっているものを「外環露出型」と呼称する。

(2) 型式の設定

以上、鉄製環頭大刀を構成する諸属性を確認し、それぞれに類型を設定した。これらの個別資料における組み合わせを示したのが表1・2である。これらに基づき、鉄製環頭大刀の系譜差を抽出するための型式設定を試みたい。

検討対象資料のうち、三葉環頭大刀については、前稿で中心飾の形態差によってある程度の時期的・系譜的差異を抽出できることを指摘した[金2021]。本稿でも中心飾の形態を基準とした型式設定を採用する。すなわち、円葉 a 類ないし円葉 b 類を有する「円葉式」、尖葉 a 類かつ蒲鉾形の外環をも

表1 素環頭大刀の型式と属性の組み合わせ

遺跡名	型式	茎の形状	全長	環頭径		正円度数	外環形状	外環接合法	金属製装具	把装具の構造	備考
				縦	横						
石川 和田山9号墳	直茎	直	(57.0)	5.7	6.9	82.6	円	接合			
愛知 白山敷古墳	直茎	直	(21.2)	6.1	7.5	81.3	円	接合			
京都 岩滝丸山古墳	直茎	直	75.8	5.8	6.2	93.5	円	?			
京都 椿井大塚山古墳	直茎	直	(93.8)	4.5	(6.0)	—	—	一体		外環被覆	
大阪 風吹山古墳	直茎	直	112.4	4.3	(5.0)	—	—	一体		外環被覆	外環に金銀象嵌文様。ガラス製ボタン状製品をともなう
大阪 七観古墳第1櫛	直茎	直	86.6	5.2	5.9	88.1	円	?		外環露出	
大阪 七観古墳第3櫛	直茎	直	(9.1)	4.7	5.5	85.5	円	?		外環被覆	
大阪 谷畑古墳	直茎	直	125.3	5.7	5.7	100.0	円	?			
兵庫 白水瓢塚古墳	直茎	直	(30.0)	4.0	6.2	64.5	扁楕円	一体		外環被覆	
奈良 ホケノ山古墳	直茎	直	(53.3)	(3.8)	(5.6)	—	—	接合			
奈良 黒塚古墳 1	直茎	直	92.5	4.2	5.4	77.8	楕円	一体		外環被覆	
奈良 黒塚古墳 2	直茎	直	(118.3)	3.4	(4.6)	—	—	一体			
奈良 黒塚古墳 3	直茎	直	(111.3)	(3.6)	(4.6)	—	—	一体			
奈良 東大寺山古墳 1	直茎	直	(124.3)	5.3	5.4	98.1	円	一体		外環被覆	
奈良 東大寺山古墳 2	直茎	直	110.6	4.8	5.4	88.9	円	一体?			
奈良 東大寺山古墳 3	直茎	直	100.4	4.4	7.8	56.4	扁楕円	一体?			
奈良 東大寺山古墳 4	直茎	直	(84.6)	3.9	5.4	72.2	扁楕円	一体?			
奈良 東大寺山古墳 5	直茎	直	82.3	4.2	5.4	77.8	楕円	一体?			
奈良 東大寺山古墳 6	直茎	直	82.0	4.5	5.8	77.6	楕円	一体?			
奈良 東大寺山古墳 7	直茎	直	(80.3)	(2.7)	(5.1)	—	—	一体?			
奈良 新沢千塚48号墳	直茎	直	69.0	5.0	6.0	83.3	円	一体		外環露出	切先のみ両刃に加工
奈良 池ノ内7号墳	直茎	直	78.5	3.2	4.5	71.1	扁楕円	一体		外環被覆	外環の大部分が把に覆われる
和歌山 百合山2号墳	直茎	直	68.0	4.8	6.5	73.8	扁楕円	一体?			両側。有装具か?
島根 大成古墳	直茎	直	(88.0)	6.0	7.3	82.2	円	一体		外環被覆	
島根 神原神社古墳	直茎	直	92.3	4.0	5.0	80.0	円	一体		外環被覆	
島根 奥才14号墳	直茎	直	81.5	3.8	4.6	82.6	円	一体			
広島 地藏堂山古墳	直茎	直	77.5	4.4	5.8	75.9	楕円	一体?			
福岡 一貴山銚子塚古墳 S4	直茎	直	(84.6)	4.8	5.4	88.9	円	?			
福岡 一貴山銚子塚古墳 W1	直茎	直	(79.7)	4.0	5.4	74.1	扁楕円	一体			
福岡 一貴山銚子塚古墳 W2	直茎	直	(67.8)	4.9	6.8	72.1	扁楕円	一体			
福岡 老司古墳3号石室	直茎	直	(81.8)	5.1	6.3	81.0	円	一体			
福岡 鋤崎古墳1号棺突起上	直茎	直	80.0	5.2	5.5	94.5	円	?		外環被覆?	
福岡 鋤崎古墳2号棺外	直茎	直	83.2	3.6	5.1	70.6	扁楕円	一体			
福岡 正籠3号墳	直茎	直	(66.6)	3.6	4.8	75.0	楕円	?		外環露出	
群馬 金井東裏1号墳	直茎	直	(77.8)	4.0	4.9	81.6	円	一体?	責・鞘口		
岐阜 熊田山北1号墳第1主体部	直茎	直	75.2	3.8	5.2	73.1	扁楕円	?	把頭・鞘口		
兵庫 宮山古墳第2主体	直茎	直	(87.2)	4.2	5.2	80.8	円	接合	把頭・鞘口		環頭茎を合わせ仕口で接合
奈良 新沢千塚323号墳	直茎	直	(71.4)	3.9	(4.8)	—	—	?	把頭		
岡山 押入西1号墳	直茎	直	(66.4)	(4.3)	4.8	—	—	?	責		
広島 緑井大上2号墳	直茎	直	76.3	3.6	5.0	72.0	扁楕円	接合	鞘口・鞘尾		環頭茎を合わせ仕口で接合
東京 野毛大塚古墳	細茎	細	88.6	4.7	5.1	92.1	円	接合			
長野 フネ古墳	細茎	細	91.0	4.6	5.6	82.1	円	接合			
滋賀 新開2号墳	細茎	細	(76.3)	(2.6)	(3.5)	—	—	一体			
京都 オアジ谷古墳	細茎	細	75.5	5.3	5.4	98.1	円	一体			
兵庫 茶すり山古墳第1主体部	細茎	細	94.3	5.4	6.4	84.4	円	接合		外環露出	
大阪 津堂城山古墳		直	(80.7)	(2.1)	(4.3)	—	—	一体		外環被覆	素環頭長剣
奈良 五条猫塚古墳		直	64.6	3.6	4.9	73.5	扁楕円	一体			素環頭長剣

* 各資料の量値には報告書図面から計測したものを含むため、厳密に正確な数値ではない。

表2 三葉環頭大刀の型式と属性の組み合わせ

遺跡名	型式	三葉文形状	法量			正円度数	外環形状	茎の形状	把装具の構造	金属製装具	備考
			全長	縦	横						
福島 会津大塚山古墳	円葉	円葉a	(117.7)	4.2	5.8	72.4	扁楕円	直			
福岡 若八幡宮古墳1	円葉	円葉a	90.6	4.5	5.7	78.9	楕円	直			
福岡 若八幡宮古墳2	円葉	円葉a	(75.1)	4.0	5.1	78.4	楕円	直			
大阪 津堂城山古墳	円葉	円葉b	(47.9)	4.4	6.1	72.1	扁楕円	直	外環被覆		中心飾も一部把に隠れる
大阪 心合寺山古墳	円葉	円葉b	85.4	4.9	6.0	81.7	円	直	外環被覆		中心飾も一部把に隠れる
福岡 老司古墳3号石室	円葉	円葉	(52.3)	4.8	6.0	80.0	円	直			中心飾形状は鏽で不明瞭
大分 上ノ坊古墳	円葉	円葉b	(92.7)	5.2	6.7	77.6	楕円	直			
福島 後作田古墳	尖葉1	尖葉a	(9.6)	4.6	5.5	—	(蒲鉾)	直			五角形に近い外環平面形
静岡 上神増E2号墳	尖葉1	尖葉a	(12.6)	4.0	5.9	—	蒲鉾	直		鉄製筒金具	
千葉 高倉古墳	尖葉2	尖葉a	(12.6)	4.6	6.4	71.9	楕円	直		把頭	
石川 下開発茶臼山7号墳	尖葉2	尖葉a	(84.2)	4.3	5.9	72.9	楕円	直	外環露出	把頭	
滋賀 二子塚古墳	尖葉2	尖葉a	(54.1)	3.9	5.6	69.6	扁楕円	直		把頭	
兵庫 宮山古墳第2主体	尖葉2	(尖葉a)	70.4	4.5	5.8	77.6	楕円	直		鍔・鞘口・鞘尾	三葉文は十字形に近い
奈良 池殿奥4号墳	尖葉2	尖葉a	(82.5)	4.4	5.8	75.9	楕円	直		鞘口	外環に銀象嵌文様
福岡 久戸9号墳	尖葉2	尖葉a	(80.0)	4.4	5.8	75.9	楕円	直		鞘口	外環に銀象嵌文様
福岡 徳永H26号墳	尖葉2	尖葉a	(66.4)	3.8	5.4	70.3	扁楕円	直			
福岡 大森7号墳	尖葉3	(尖葉b)	(12.6)	6.3	6.8	92.6	円	直			三葉文が特異な形状。中心飾の付け根と茎の幅がほぼ同じ
宮崎 伝 本庄古墳群	尖葉3	尖葉b	9.2	5.6	(6.4)	87.5	円	直	外環露出		

※ 各資料の法量値には報告書図面から計測したものを含むため、厳密に正確な数値ではない。

つものを「尖葉1式」、尖葉a類かつ非蒲鉾形の外環をもつものを「尖葉2式」、尖葉b類の外環をもつものを「尖葉3式」とする。

一方、中心飾をもたない素環頭大刀では、上記の三葉環頭大刀のような型式設定ができない。ここでは、茎の形状に着目した分類を試みる。すなわち、直茎のものを「直茎式」、細茎のものを「細茎式」とする。

直茎式素環頭大刀は、環頭部の法量や外環形状、外環接合方式などにかかなりばらつきがある。研究史で、古墳時代以降に出現する特徴とされた接合型の外環は奈良県ホケノ山古墳例(図4-1)ですすでに出現しているが、一体型の事例は古墳時代を通じて確認される。直茎式と大別した資料群の中に、まだ複数の系譜が内包されている可能性が高い。しかしそれらの峻別は容易ではなく、ここではひとまず別づくりの鉄製装具をともなう有装具の資料群を分離する。

細茎式素環頭大刀は、特徴的な茎形状を有し、円形の外環形状を志向するなど各属性のまとまりもある程度認められることから、直茎式の諸資料とは異なる系譜の資料として抽出し得る一群と考えられる。事例数は5例と少ないが、現状、金属製装具をもつものは認められず、外環被覆型の把装具をもつ事例も確認できない。

(3) 各型式の存在年代幅

上で設定した各型式の存在年代幅を、共伴遺物から確認しておきたい。直茎式素環頭大刀の上限は弥生時代に遡り、古墳時代全体を通じて認められる。時期が下る事例として和歌山県百合山2号墳例が挙げられ、おおむねTK10型式に並行する須恵器をともなう[森・田中1960、和歌山県文化財センター2010]。古墳時代初頭から後期前半まで通時的に認められる型式であるが、このうち有装具の事例は、最古段階の小札甲I類[初村2011]や双方中円形2類の吊手金具と円頭形勾玉状金具をともなう胡籙金具[土屋2018]などと共伴する兵庫県宮山古墳第2主体例(図5-1)が最も古い。群馬県金井東裏1号墳第1主体部例は、1号墳周堀に堆積したHr-FA層の存在と共伴する長頸鏃から5世紀末頃の年代と推定されている[群馬県埋蔵文化財調査事業団2019]。現状では、中期中葉～後期初頭までに集中している。

細茎式素環頭大刀は、いずれも中期以降に下る。東京都野毛大塚古墳第1主体部例(図5-4)は、三角板革綴衝角付冑や付属具をともなう長方板革綴板甲などと共伴し、中期前葉の年代が想定される

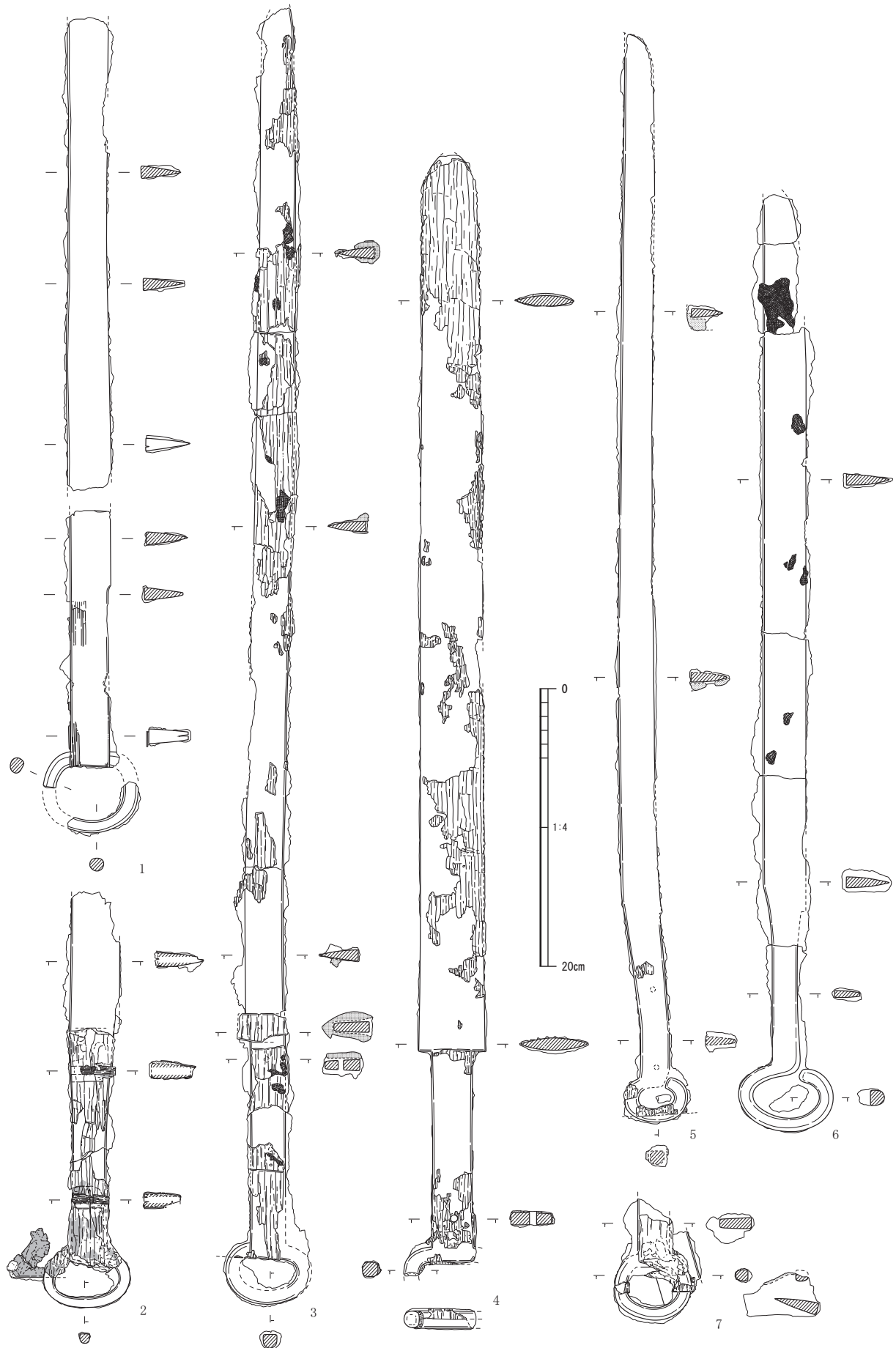


図4 素環頭大刀の諸例（1）

1. 奈良・ホケノ山（直茎式）、2. 兵庫・白水瓢塚（直茎式）、3. 京都・椿井大塚山（直茎式）、4. 大阪・津堂城山（長剣）、
5. 奈良・池ノ内7号（直茎式）、6. 福岡・一貴山銚子塚 W2（直茎式）、7. 大阪・七観3柳（直茎式）

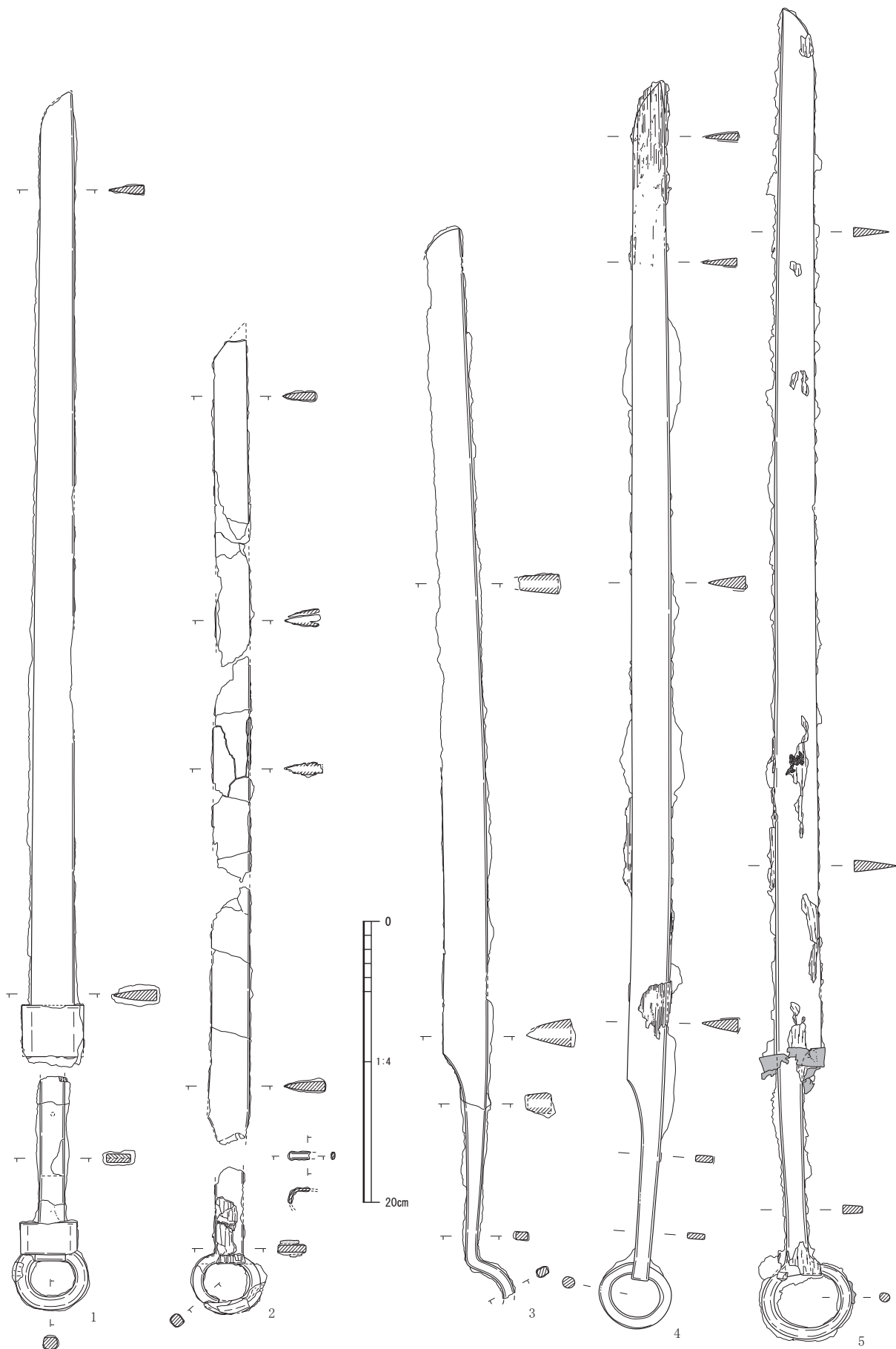


図5 素環頭大刀の諸例(2)

1. 兵庫・宮山第2 (直茎式・有装具)、2. 岡山・押入西1号 (直茎式・有装具)、
 3. 滋賀・新開2号 (細茎式)、4. 東京・野毛大塚 (細茎式)、5. 兵庫・茶すり山第1 (細茎式)

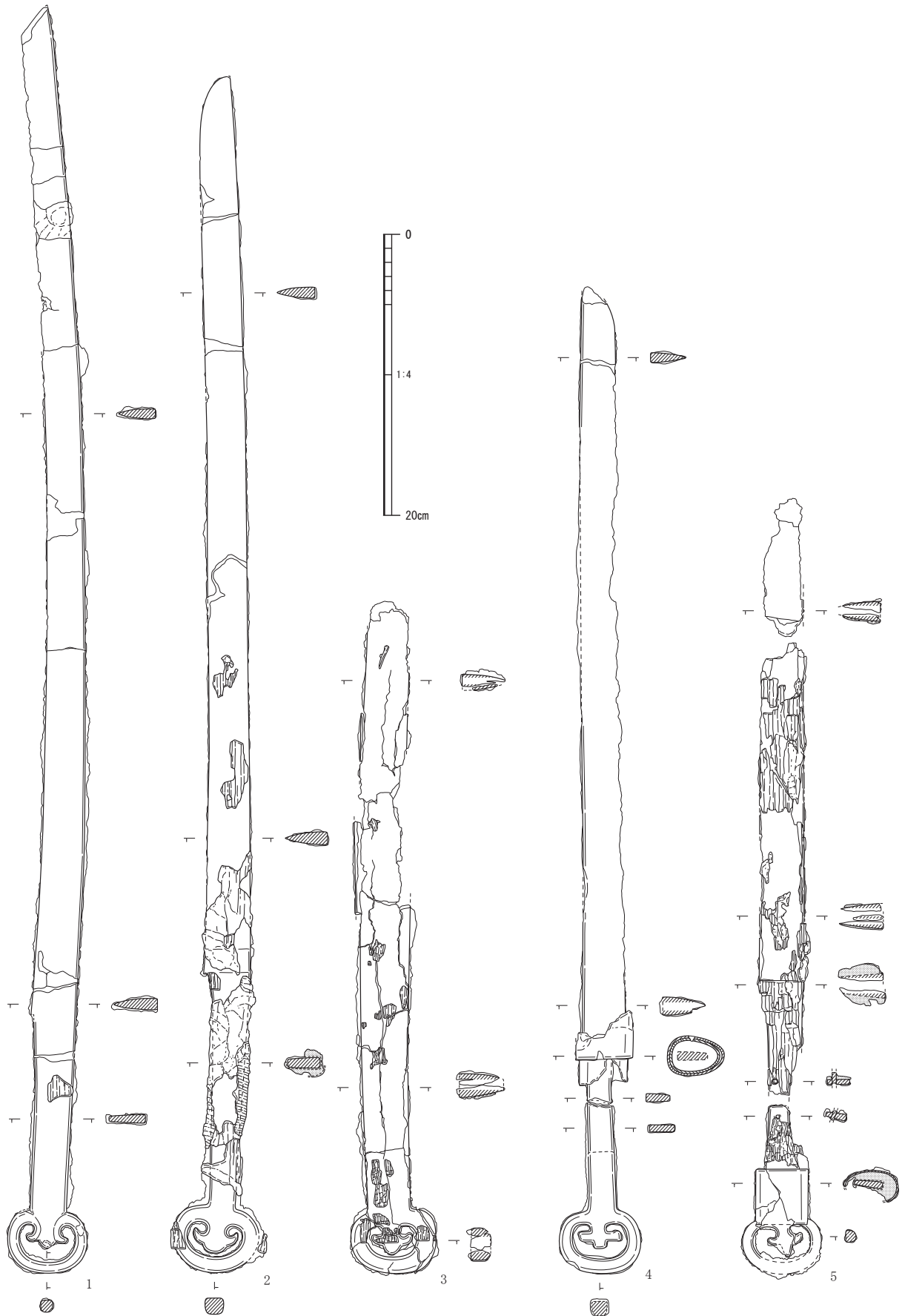


図6 三葉環頭大刀の諸例

1. 福島・会津大塚山（円葉式）、
2. 大阪・心合寺山（円葉式）、
3. 大阪・津堂城山（円葉式）、
4. 兵庫・宮山第2（尖葉2式）、
5. 滋賀・二子塚（尖葉2式）

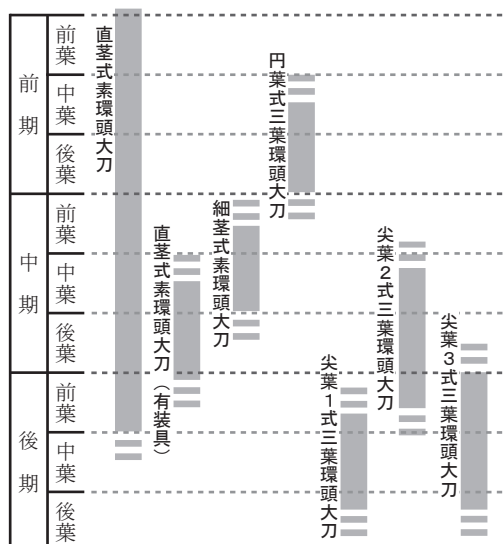


図7 鉄製環頭大刀の型式別存在年代幅

[野毛大塚古墳調査会編 1999]。兵庫県茶すり山古墳第1主体部例(図5-5)は、三角板革綴襟付板甲を含む甲冑類などをともなっており[兵庫県立考古博物館 2010]、中期前葉から中葉頃と評価できる。このように細茎式素環頭大刀は、中期前半を中心とする比較的短い時期幅にまとまる可能性が高い。

三葉環頭大刀の諸型式については、前稿で存在年代幅を検討した[金 2021]。以下、概要を示すと、円葉式は前期中葉から中期前葉にみられ、現状で大阪府心合寺山古墳例(図6-2)が下限である。尖葉1式はおおむね後期に下り、TK43型式並行期の須恵器をとまなう静岡県上神増E2号墳例が最も新しい[大谷・大森 2017]。尖葉2式は、宮山古墳第2主体例(図6-4)など中期中葉から末に集中する。尖葉3式は、福岡県大森7号墳例と伝宮崎県本庄古墳群例が該当し⁽⁷⁾、前者はTK208型式期に遡る可能性が指摘されている[齊藤 2020]が、金銅製の尖葉3式の事例はTK10～TK43型式期におさまり[金 2021]、中心となる時期は後期中葉～後葉に下るとみられる(図7)。

尖葉3式は、福岡県大森7号墳例と伝宮崎県本庄古墳群例が該当し⁽⁷⁾、前者はTK208型式期に遡る可能性が指摘されている[齊藤 2020]が、金銅製の尖葉3式の事例はTK10～TK43型式期におさまり[金 2021]、中心となる時期は後期中葉～後葉に下るとみられる(図7)。

3. 鉄製環頭大刀の把装具意匠の変化

以上、大まかにではあるが、鉄製環頭大刀を分類し、各型式の年代を確認した。これを踏まえ、本節では把装具意匠の変遷について検討してみたい。

(1) 外環被覆型把装具の様相

繰り返しになるが、古墳時代の鉄製環頭大刀には、遺存した木質痕跡から明らかに外環の一部が把装具に隠れてしまっている外環被覆型の事例が散見する。大陸・半島の資料や壁画をみても、いずれも環頭部の全体が露出している[町田 1976、禹 1991、豊島 2006]。外環被覆型の把装具の採用は日本列島独自の在り方といえるが、特別な刀剣であることを示す重要なシンボルの環頭部を覆い隠してしまうこうした把装具の特徴には、違和感を禁じ得ない。

鉄製環頭大刀における外環被覆型把装具の採用は、鳥根県神原神社古墳例など前期の早い時期から確認される。水野敏典は、福岡県博多遺跡群や奈良県纏向遺跡で大型砥石が複数出土していることなどを根拠に、直刀をはじめとする大型利器の製作開始が古墳時代前期前葉以前に遡る可能性を指摘しており[水野 2022b]、素環頭大刀の列島内製作も技術的には必ずしも不可能ではなかったと考えられる。しかし、わざわざ半分隠れる把を装着させることを前提に製作難度の高い環頭部付きの大刀をつくったとも考え難く、外部から入手した環頭大刀に把を付け替えた⁽⁸⁾と推測するのが妥当と考えたい。

このことを考察する上で、外環被覆型把装具を取り付けた三葉環頭大刀の存在は示唆的である。大阪府心合寺山古墳例(図6-2)は、外環のみならず中心飾も把に覆われてしまっており、主葉のごく一部しか見えていない。把装具を装着した状態では、それが三葉環頭大刀であることを認識するのも困難である。三葉環頭大刀の製作は素環頭大刀よりも難易度が高く、舶載品である蓋然性がより高

いとみられる。せつかく環内につくり出したモチーフが把で見えないという状況は、副葬時に取り付けられていた装具が三葉環頭大刀に元来ともなうものではなく、日本列島での流通の過程で付け替えられたものである可能性を支持する。

大阪府津堂城山古墳出土三葉環頭大刀（図6-3）でも、三葉文が把装具に隠れてしまった状況が看取される。本例では、環頭部のちょうど半ばあたりに木質の切れ目が確認でき、中心飾の上半分は露出している状況であるが、側葉の先端が隠れているため、やはり三葉文の認識は困難とみられる。津堂城山古墳例の存在は、上述の心合寺山古墳例がたまたま三葉環頭大刀に本来付けられるはずのない把装具を付された特殊な事例ではないことを裏付ける。

素環頭大刀においてはどうかであろうか。多くの資料は、把頭端部の木質痕跡が外環先端と基部の真ん中あたりにみられるが、奈良県池ノ内7号墳の素環頭大刀（図4-5）は、先行研究でもたびたび言及されてきたように、環頭部に付着した木質端部の痕跡がほぼ外環の先端部に確認される。環頭部はほとんど露出しておらず、環頭大刀であることさえ識別困難である。当初から刀身本体に合わせて設計された把装具とはみなし難い。

刀剣装具の付け替え行為は、古墳時代前期のヤリでも指摘されている。豊島直博は、ヤリの柄⁽⁹⁾の製作に「糸巻き、漆塗り、突出部の加工という画一的な技法」が認められ、その型式変化による簡略化が列島全域で連動することから、「各地域で分散的な生産がおこなわれていたと見ることは難しい」と論述する。加えて、同じ型式の柄を取り付けたヤリ本体の法量に規格性がない点、本来鉄剣として製作されたものがヤリに転用されたとみられる事例が認められる点から、「ヤリの生産は鉄本体を含む一貫した体制ではなく、鉄本体の製作と柄の装着が異なる体制の下におこなわれていたと見るべき」と推断している〔豊島2008〕。つまり古墳時代前期には、鉄製武器が倭王権の中枢地域に集積され、装具の取り付けといった加工を施して再配布する、という流通の在り方が機能していた。鉄製環頭大刀も、主に舶載によって王権中枢に一度集められたのち、独自の把装具を取り付けて配布されたと理解できる。

ここで重要となるのは、その把の取り付け行為にどれほどの意味が見出されていたのかである。津堂城山古墳出土の素環頭長剣（図4-4）は、環頭部基部側面に木質痕跡が残る（図8-1）。このことは、環頭部の下半を被覆する把頭装具が、外環の形状に合わせて正確に溝を割り抜いた

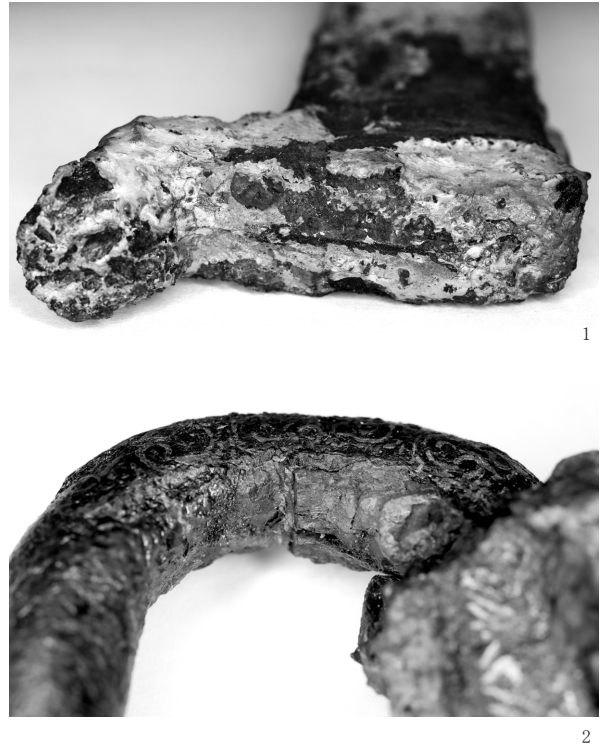


図8 環頭部内側面に付着した把装具痕跡

1. 大阪・津堂城山、2. 大阪・風吹山

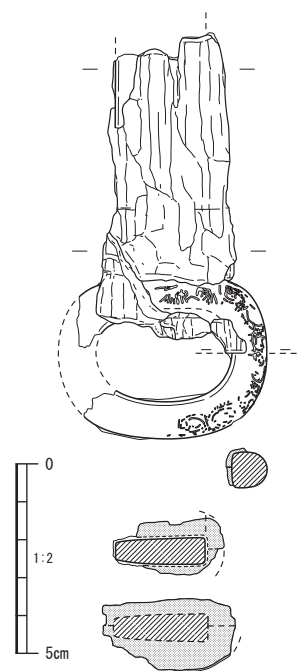


図9 風吹山古墳出土素環頭大刀把頭

材を2枚合わせにしてつくられたものであることを示している。つまり、少なくともこの津堂城山古墳例の把装具は刀本体の形状に合わせてオーダーメイドされたものであり、環頭部を部分的に隠すというデザインが明確に意図されたものであったと推定する材料となる。

大阪府風吹山古墳の環頭大刀は、鉄製の環頭部に象嵌で複雑な文様を表した稀少な素環頭大刀であるが、やはり木質痕跡が環頭部の半ばに及んでおり、外環の一部が施された象嵌文様ごと隠れてしまっている(図9)。しかも、本例でも上述の津堂城山古墳出土素環頭長剣と同様、外環内側面の木質附着状況が観察できる(図8-2)。風吹山古墳例の把装具もやはり、環頭部の形態に合わせて製作されたものと推定できる。このことは、象嵌の文様や中心飾の意匠よりも把装具を装着したシルエットの方が優先されたことを如実に示しており、外環半分が露出した把装具を取り付けた全体の意匠に何らかの強い意味が見出されていたことを読み取ることができる。

(2) 外環被覆型把装具の年代的下限

外環被覆型把装具の痕跡を残す資料のうち最も時期が下る事例は、管見による限り、大阪府七観古墳第3槨例(図4-7)である。外環のちょうど真ん中あたりで、土ごと錆化した木質が直線的に途切れる状況を確認できる。一方で、同第1槨出土例では、把端の木質痕跡が外環基部手前で明瞭に認められ(図10)、外環全体が見える形状の把装具が装着されていたことがわかる。おおむね中期前葉を前後する頃からTK73並行期頃までに、外環被覆型の把装具は姿を消していくとみられる。

これと前後して鉄製環頭大刀に新しい型式が出現することは重要である。素環頭大刀では、細莖式や有装具の直莖式の事例が出現する。三葉環頭大刀でも円葉式がみられなくなり、尖葉2式が現れる。注目されるのは、新しく出現するこれらの型式には、外環被覆型が認められないという点である。細莖式素環頭大刀は、木質が遺存する例が少ないが、兵庫県茶すり山古墳第1主体部例(図5-5)では、外環基部付近で直線的に木質が途切れる状況が認められ、確実な外環露出型の事例と評価できる。

有装具の直莖式素環頭大刀でも外環露出型が基本である。鉄製責金具の破片をとまう岡山県押入西1号墳例(図5-2)は、外環の基部付近で把装具の端部とみられる直線的な木質痕跡が確認される。筒状の鉄製装具をとまう場合は、金具の内部に木製部材が充填されるため、筒金具より環頭側に把端の木質痕跡が及ぶ余地がない。兵庫県宮山古墳第2主体の素環頭大刀(図5-1)や三葉環頭大刀(図6-4)、滋賀県二子塚古墳の三葉環頭大刀(図6-5)などがこれに該当する。



図10 七観古墳第1槨出土素環頭大刀の把装具痕跡

このように、中期前葉頃に新たな型式の鉄製環頭大刀が出現する中で、外環被覆型の把装具も消えていくことが確認できる。ただし、新型式の鉄製環頭大刀の把装具が変化したことは、倭王権中枢への集積・加工・配布という流通プロセス自体が変化したことを示すわけではない。岐阜県熊田山北1号墳の直莖式素環頭大刀は、把にいわゆる「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」[沢田2008]と呼ばれる有機質把巻きが確認される(図11-1)。これは絹糸を束ねてつくった二本の芯材をさらに別の繊維で外巻きして一本の紐に仕上げたもので、中期初頭から後期にかけて鹿角装の鉄刀剣や木装の楔形把頭をもつ鉄刀といった日本列島の

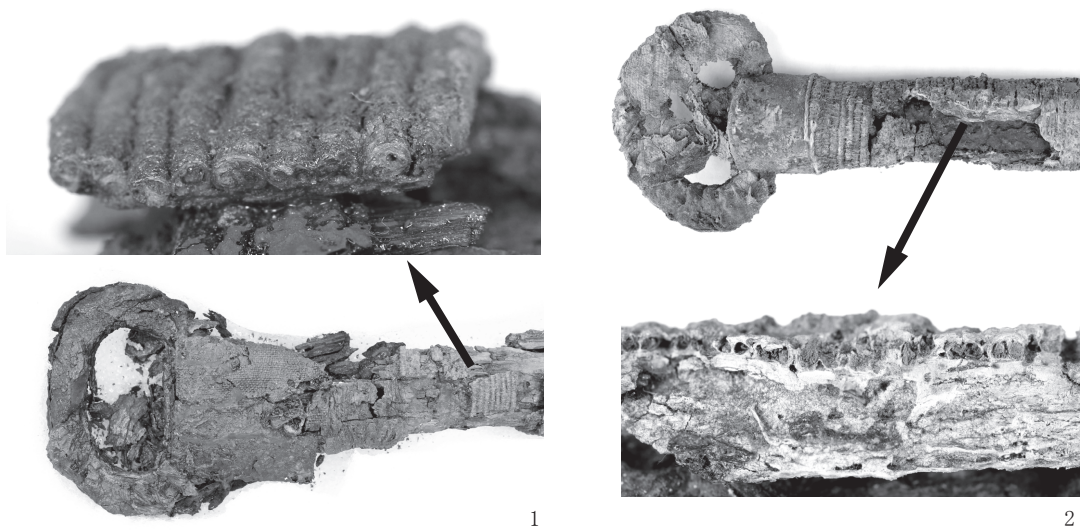


図 11 有装具の鉄製環頭大刀に巻かれた把紐の断面
1. 岐阜・熊田山北1号、2. 京都・産土山

伝統的刀剣外装に付随する把巻きとして確認される〔藤田 2022〕。非常に複雑な構造の紐であり、在地で把紐を製作して巻き直したとは考え難く、一度倭王権中枢に集積され、そこで把巻きを施されたのち、配布されたものと考えられる。同様の把巻きは、京都府産土山古墳出土の二葉環頭刀においてもみられる（図 11-2）。新しい型式の鉄製環頭大刀も、流通の過程で一度中央を経由している可能性が高い。とすれば、外環被覆型把装具の採用が終了したのは、器物の流通・配布システムが変化したためというより、その把装具意匠への価値付加の在り方に変化が生じたためと推測される。

4. 鉄製環頭大刀の系譜と振り環意匠の評価

(1) 中期の画期における鉄製環頭大刀の変化

前章で、新たな型式が出現する中期前葉頃を境に外環の一部を被覆する把装具意匠も変化・消滅することを確認した。ここでは、各型式の鉄製環頭大刀の系譜を探りつつ、その背景を探ってみたい。

円葉式三葉環頭大刀は、京都大学総合博物館所蔵の銀象嵌青銅製三葉環頭刀〔河村・坂川・志賀 2020〕など漢代の類例が知られ、中国大陸にその源流を求めることができる⁽¹⁰⁾〔金 2021〕。前期の直茎式素環頭大刀には複数系譜の資料が含まれるとみられるが、上述の円葉式三葉環頭大刀の存在から、中国大陸からの舶載品が多く含まれる可能性が高い。とりわけ、奈良県黒塚古墳例をはじめとする全長 1 m 以上の長大な事例は、朝鮮半島南部では出土資料が確認されていないが、中国大陸では河南省新系王門墓地の出土例〔河南省文物局 2017〕などの後漢の事例や、山東省臨沂洗砚池晋墓 M 1 西出土例〔山東省文物考古研究所・臨沂市文化広電新聞出版局 2016〕などの西晋の事例、遼寧省北票喇嘛洞 I M10 号墓例〔豊島 2006〕などの三燕の事例が知られており、やはり中国からの舶載説が支持される。ただし、後漢や西晋の出土例はいずれも外環別づくりの接合型で無関とされており、やや慎重な検討を要する⁽¹¹⁾〔水野 2022b〕。

一方、中期前葉以降に新たに出現する型式については、朝鮮半島出土資料に系譜を求められるものが多い。尖葉 2 式三葉環頭大刀は、個々の資料にややバリエーションがあり、複数の系譜を内包

する可能性があるが、主に百済ないし大加耶地域を中心に系譜を求めるとみられる〔金2021〕。これらの三葉環頭大刀にも付随する鉄製装具をともなう直茎式素環頭大刀の類例も、朝鮮半島南部の各地で出土している。特に、把頭元と鞘口に筒金具を付す事例は、半島各地で普遍的に確認される。朝鮮半島のいずれかの地域から搬入されたものと理解するのが妥当であろう。

細茎式素環頭大刀の系譜的評価は、資料が十分でないため容易ではない。中国における類例は不明瞭であるが、朝鮮半島では、百済圏域の舒川鳳仙里 3-1-12 号墳や天安龍院里 130 号石槨墓、大加耶圏域の陝川三嘉 M7-2 号墳などで、類例とみられる資料を確認できる〔李2009、金2016〕。詳しい系譜を確定させることは困難であるものの、本稿では暫定的に百済ないし加耶圏域からの舶載品である可能性が高いものと捉えておきたい。

このように、古墳時代の鉄製環頭大刀は、中期前葉頃を境にその主な舶載元が中国大陸から朝鮮半島へと変化した可能性が高い。そして、こうした系譜の変化と外環被覆型把装具の消長が連動する。このことは、新たな型式の環頭大刀が日本列島へと流入するのにもなって大刀外装の変化が生じ、さらには中心飾や象嵌文様よりも重視され強い価値を見出されていた外環被覆型の把頭意匠の価値認識が変質したことを示唆する。つまり、鉄製環頭大刀の集積・加工・配布を担っていた倭王権中枢で、特定意匠への価値付与の在り方が刷新されたことがうかがわれる。

(2) 振り環意匠の成立と「復古再生」の可能性

ここまでの検討を踏まえた上で、翻って振り環意匠の出現をいかに評価し得るかを考えてみたい。

振り環頭大刀の出現は、大阪府峯ヶ塚古墳例などから TK47～MT15 型式期と指摘されており〔深谷2008〕、おおむね古墳時代後期の開始を前後する時期に該当する。高松雅文は、振り環頭大刀の性格について、分布状況の特徴から 6 世紀前半に政権中枢を担った集団、すなわち継体大王とその支援勢力によって政治的に利用されたものであった可能性に論及している〔高松2006 ほか〕。福永伸哉は、この時期における威信財変化の特徴の一つとして「5 世紀からすでに列島内に存在していた要素を形や素材、規格などを変えながら再現し、普及増大させていく」という在り方があることを指摘する〔福永2005〕。振り環頭大刀の導入が継体朝への政権交替に連動するものとして評価し得るかについてはより慎重な検討が必要とは考えるが⁽¹²⁾、振り環頭大刀というまったく新しい威信財的器物の創出に際して、古墳時代前期以来の大刀意匠のシンボル性に着目し、これを「復古」させることで価値を付与したと評価することは突飛な解釈ではないと考える⁽¹³⁾。振り環頭大刀をはじめとする倭装大刀は、刀身の大型化が一つの大きな特徴であるが、実用品としての大刀の枠組みを完全に逸脱した、新たな威信を表徴するシンボルとしての使用が想定された器物と評価できる。より強い表徴機能を付加するために、かつて高い象徴性が認知・共有されていた意匠の復活を試みた可能性は十分に考え得る。装飾性を有した新しい大刀の創製に際して、直感的に認識可能な象徴性を付す目的で大刀意匠の「復古」的採用があったものと理解したい。

おわりに

以上、古墳時代の鉄製環頭大刀の分析を通じて、振り環頭大刀の把頭意匠の出現に器物の「復古再生」的視点からの評価を試みた。古墳時代前期、鉄製環頭大刀に外環を一部被覆する把装具が採用され、その意匠には中心飾や象嵌文様よりも優先される強い価値が見出されていた。中期前葉頃、朝鮮半島に系譜をもつ新型式の鉄製環頭大刀が出現するとともに外環被覆型の把装具は姿を消すが、振り

環頭大刀という新たな威信財的器物の創出に際して、そのシンボル性をより高めるため、かつての外環被覆型把装具を装着した鉄製環頭大刀のシルエットを「復古」的に採用したと解釈した。

本来、「復古再生」の議論は、前提として「伝世品」の存在が認められなくてはならない。外環被覆型把装具を取り付けた素環頭大刀の実資料がTK47型式期以降に確認されていない以上、本稿での解釈はあくまで、伝世ないし長期保有されていた外環被覆型の環頭大刀が存在していたという仮定の上での推測を脱し得ない。しかし、冒頭で触れたように、藤ノ木古墳で刃関双孔をもつ装飾付剣が出土していることから、こうした仮説は必ずしも荒唐な推論ではないと考える。

なお、本稿での系譜検討は、主に日本列島出土資料を中心に試みたものであり、中国、朝鮮半島の出土資料の検討は依然十分ではない。これらを含めた分析の深化を向後の課題としておきたい。

謝 辞

本稿をなすにあたり、坂川幸祐氏に中国出土資料に関して有益な教示を得た。また、本稿の分析のための資料調査に際しては、以下の諸氏・諸機関にお世話になった。末尾ながら記して感謝申し上げる。

跡部信、大谷輝彦、伊庭功、近藤美穂、白井忠雄、阪口英毅、土屋隆史、豊島雪絵、中村大介、平井洸史、宮崎雅充、三輪望、村上由美子、福西貴彦、山岡邦章、横田真吾（あいうえお順・敬称略）。

大阪城天守閣、各務原市教育委員会、岸和田市教育委員会、九州国立博物館、京都大学総合博物館、宮内庁書陵部、神戸市文化財課、滋賀県立安土城考古博物館、高島市教育委員会、津山市文化課、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、姫路市教育委員会、福島県立博物館、八尾市埋蔵文化財調査センター。

註

- (1) 銘文をもたない鉄製刀剣の中に漢代の伝世品が混じっている可能性は否定できない。しかし、錆化が著しく属性も不十分な鉄製刀剣から、そうした時期差を把握し得るだけの詳細な編年を確立するのは極めて困難である。
- (2) 橋本は、この種の大刀に付く「振り環」が、いわゆる環頭大刀とは構造的に異なることから、「振り環付大刀」と呼ぶのがふさわしいと提言している〔橋本2005〕。氏の指摘は的確であると考え、現状「振り環頭大刀」が慣用的に広く使用されていることを考慮し、本稿では「振り環頭大刀」の用語を採用しておく。
- (3) 池淵俊一は、古墳時代中期前半に出現する、関が深く切れ込み茎幅が細くなるタイプの資料群を列島製品と解釈している〔池淵1993〕。菊地芳朗も、古墳時代前期に中国南朝から工人集団が渡来して新たな技術がもたらされたとする今尾の見解〔今尾1982〕を踏まえ、素環頭大刀の一部に列島製品が含まれる可能性に言及している〔菊地1996〕。
- (4) 日本列島出土の鉄製環頭刀は基本的に素環ないし三葉環で構成されるが、「二葉」の中心飾をもつ京都府産土山古墳出土環頭小刀（図11-2）や、巻き込んだ外環の端部が角状に立ち上がり、さながら「一葉」環頭大刀といった形状を呈する兵庫県伊和中山1号墳例のような特異な例外も存在する。
- (5) 環頭部の縦幅を横幅で割り、100を掛けた数を真円度数と定義する。真円度数が100に近付くほど真円に近く、100を下回るほど横方向に扁平な楕円形であることを示す。
- (6) 岸本晴菜は、古墳時代前期に「茎部が環頭部に向かって細くなるタイプ」が出現することを指摘しており〔岸本2022〕、本稿分類の「直茎」に細分の余地がある可能性がうかがわれる。しかし現状では、悉皆的な実見調査を完遂できておらず、実測図のみから厳密な定義を設定するのは難しい。今後の検討視点としておきたい。
- (7) 近年、鹿児島県成川遺跡2020-1号墓で尖葉3式の鉄製三葉環頭大刀把頭が出土した〔竹中ほか2021〕。
- (8) 倭王権の中枢勢力が鉄製素環頭大刀を入手した時点で装具が取り付けられていないケース、つまり刀本体のみが流通している可能性もある。その場合、厳密には「把の取り替え」ではなく、拵えを取り付けて完成品としての「仕上げ」をおこなう工程となる。

- (9) 本稿では、剣や刀に付随する短い把握部を「把」、やりやホコにともなう長い棒状の持ち手部分を「柄」と、表記を区別する。
- (10) ただし、釜山福泉洞 60 号墳例や同 69 号墳例など、朝鮮半島においても円葉式三葉環頭大刀の出土例は存在する [金 2016]。
- (11) 喇嘛洞墓地での出土例には、短いものも含めると、一体型接合とみられる素環頭大刀の事例も確認される [豊島 2006]。
- (12) 齊藤大輔が指摘するように、刀身の大型化そのものは TK208 型式期に遡るとみられる [齊藤 2017]。
- (13) なお、振り環頭大刀の「外環部分」が、振りをもつが故に外環被覆型把装具からのぞく外環部分との類似性を損ねている点については、橋本英将が「環部を製作するにあたっての便宜」という視点から説明を試みている。すなわち、「棒状の鉄を製作するにあたっては、断面が円形になるものよりも断面が四角形などの多角形になるものの方が、鍛造技術上はるかに容易である」が「角をもたせたままでは使用上不都合が生じる場合がある」ため、これを解決するため「棒をねじって角の持つせん断応力を弱める」という方法を取ったと想定している [橋本 2006]。

引用文献

- 池淵俊一 1993 「鉄製武器に関する一考察 —古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』第 1 号 島根県古代文化センター pp.41-104
- 李ボラム 2009 「錦江流域原三国～三国時代の環頭刀研究」『韓国考古学報』71 輯 韓国考古学会 pp.70-101 (韓国語)
- 今尾文昭 1982 「素環頭大刀考」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』橿原考古学研究所 pp.15-62
- 今尾文昭 1986 「素環頭鉄刀と三世紀」『三世紀の九州と近畿』河出書房新社 pp.173-196
- 岩本 崇 2006 「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」『考古学雑誌』第 90 巻第 4 号 日本考古学会 pp.1-35
- 禹 在柄 1991 「素環刀の形式学的研究」『待兼山論叢』第 25 号 史学篇 大阪大学文学会 pp.83-113
- 禹 炳喆 2014 「新羅の武器」『新羅考古学概論』下 ジンインジン pp.334-369 (韓国語)
- 大谷宏治・大森信宏 2017 「磐田市上神増 E 2 号墳出土三葉環頭大刀について」『静岡県埋蔵文化財センター 研究紀要』第 6 号 静岡県埋蔵文化財センター pp.19-22
- 置田雅昭 1989 「中国鉄素環頭大刀の把の構造」『古文化談叢』第 20 集 (中) 九州古文化研究会 pp.77-84
- 小田木治太郎・藤原郁代 (編) 2011 『東大寺山古墳の研究』真陽社
- 加藤一郎 2002 「素環頭鉄刀の把の構造について」『鋤崎古墳—1981～1983 年調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 730 集 福岡市教育委員会 pp.122-126
- 河南省文物局 2013 『新系王門墓地』科学出版社 (中国語)
- 河村佳男・坂川幸祐・志賀智史 2020 「銀象嵌青銅環頭刀の調査」『京都大学総合博物館ニューズレター』No.48 京都大学総合博物館 pp.4-5
- 神林淳雄 1940 「鉄装大刀と鉄製柄頭」『考古学雑誌』第 30 巻第 3 号 考古学会 pp.23-35
- 菊地芳朗 1996 「前期古墳出土刀剣の系譜」『雪野山古墳の研究』考察編 八日市市教育委員会 pp.49-82
- 菊地芳朗 2010 『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
- 兵庫県立考古博物館 2010 『史跡 茶すり山古墳—一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路 II 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—VII』兵庫県文化財調査報告 第 383 冊 兵庫県教育委員会
- 岸本晴菜 2022 「刀剣類をめぐる中期の変化」『刀剣—武器から読み解く古代社会—』ハーベスト出版 pp.164-168
- 金 宇大 2021 「日本列島出土三葉環頭大刀の系譜」『昼飯の丘に集う—中井正幸さん還暦記念論集—』「中井正幸さんの還暦をお祝いする会」事務局 pp.63-72
- 金 眺咏 2016 「加耶の武器」『加耶考古学概論』ジンインジン pp.356-409 (韓国語)
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2019 『金井東裏遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第 652 集
- 児玉真一 1982 「鉄製素環刀—集団墓出土資料を中心に—」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上巻 森貞

- 次郎博士古稀記念論文集刊行会 pp.703-724
- 後藤守一 1928「原史時代の武器と武装（続編）」『考古学講座』第六卷 雄山閣 pp.199-400
- 齊藤大輔 2017「古墳時代中期刀剣の編年」『中期古墳研究の現状と課題Ⅰ～広域編年と地域編年の齟齬～』中国四国前方後円墳研究会第20回研究集会 発表要旨・資料集 中国四国前方後円墳研究会第20回研究集会(徳島大会) 実行委員会 pp.73-88
- 齊藤大輔 2020「新羅系文物からみた磐井の乱前夜—セストノ古墳出土扁円魚尾形杏葉を中心に—」『福岡大学考古学論集3—武末純一先生退職記念—』福岡大学考古学研究室 pp.337-352
- 沢田むつ代 2008「古墳出土の鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き—織物などの種類と仕様—」『MUSEUM』第617号 東京国立博物館 pp.5-35
- 山東省文物考古研究所・臨沂市文化広電新聞出版局 2016『臨沂洗砚池晋墓』文物出版局（中国語）
- 末永雅雄 1938「環頭大刀」『考古学論叢』第8輯 考古学研究会 pp.107-138
- 野毛大塚古墳調査会（編） 1999『野毛大塚古墳—東京都世田谷区野毛1丁目所在の古墳保存整備・発掘調査記録—』
- 高橋健自 1910「日本上古の刀剣に就きて」『史学雑誌』第21編第8号 史学会 pp.1-43
- 高松雅文 2006「振り環頭大刀と古墳時代後期の政治的動向」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』川西市教育委員会 pp.259-280
- 竹中正巳ほか 2021「成川遺跡第4次2020年発掘調査速報」『鹿児島女子短期大学紀要』第58号 鹿児島女子短期大学 pp.1-10
- 土屋隆史 2018『古墳時代の日朝交流と金工品』雄山閣
- 豊島直博 2005「弥生時代における素環刀の地域性」『待兼山考古学論集 都出比呂志先生退官記念』大阪大学考古学研究室 pp.227-244
- 豊島直博 2006「三燕および日本出土鉄製刀剣の比較研究」『東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集—』奈良文化財研究所 pp.73-80
- 豊島直博 2008「古墳時代前期におけるヤリの編年と流通」『東国史論』第22号 群馬考古学研究会 pp.1-26
- 奈良県立橿原考古学研究所 2008『ホケノ山古墳の研究』橿原考古学研究所研究成果 第10冊
- 橋本英将 2005「心合寺山古墳出土鉄製三葉環頭大刀の構造と意義」『史跡 心合寺山古墳整備事業報告書』八尾市教育委員会 pp.144-149
- 初村武寛 2011「古墳時代中期における小札甲の変遷」『古代学研究』第192号 古代学研究会 pp.1-19
- 深谷淳 2008「金銀装倭系大刀の変遷」『日本考古学』第26号 日本考古学協会 pp.69-99
- 福永伸哉 2005「いわゆる継体期における威信財変化とその意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告 第3冊 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団 pp.515-524
- 藤田淳 2022「兵庫県における古墳出土刀剣の把巻と把装具について—二本芯並列コイル状二重構造糸巻きを中心に—」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第15号 兵庫県立考古博物館 pp.11-30
- 町田章 1976「環刀の系譜」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報 第28冊 奈良国立文化財研究所 pp.77-110
- 水野敏典 2022a「刀剣からみた藤ノ木古墳—復古的な様相にみるその性格—」『大和の中の東アジア 藤ノ木古墳』第42回 奈良県立橿原考古がら研究所公開講演会資料 奈良県立橿原考古学研究所・由良大和古代文化研究協会 pp.9-16
- 水野敏典 2022b「黒塚古墳にみる武器副葬とは何か—古墳時代前期前半の武器副葬の—」『古代武器研究』Vol.17 古代武器研究会 pp.59-78
- 森浩一・田中英夫 1960「和歌山県百合山古墳群調査概要」『古代学研究』第24号 古代学研究会 pp.8-15
- 山内紀嗣 2010「古墳時代前期環頭大刀の把木端をめぐる」『東大寺山古墳の研究』真陽社 pp.361-364
- 和歌山県文化財センター 2010『百合山古墳群調査報告書—県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書—』

図表出典（記載のないもの、所蔵先を記したものは筆者作成・実測・撮影）

図 1：橋本 2005 をもとに菊地 1996、橋本 2005、高松 2006 から再構成。図 4：1. 奈良県立橿原考古学研究所 2008 を改変再トレース、2. 神戸市文化財課、3・6・7. 京都大学総合博物館、4. 宮内庁書陵部、5. 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。図 5：1. 姫路市教育委員会、2. 津山市、3. 滋賀県立安土城考古博物館、4. 野毛大塚古墳調査会編 1999 を改変再トレース、5. 兵庫県立考古博物館 2010 を改変再トレース。図 6：1. 福島県立博物館、2. 八尾市埋蔵文化財調査センター、3. 宮内庁書陵部、4. 姫路市教育委員会、5. 高島市教育委員会。図 8：1. 宮内庁書陵部、2. 岸和田市教育委員会。図 9：岸和田市教育委員会。図 10：大阪城天守閣。図 11：1. 各務原市埋蔵文化財調査センター、2. 京都大学総合博物館。